

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④7

別離久しく長し

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第116回から118回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第114回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■「会い見ること期なし」

「窈窈冥冥として別離久しく長し」（『真宗聖典』60頁、東本願寺出版）。「窈」ようというのは、かすかである。「冥」めいは暗いという意味です。光が入らないような状態で、ほとんど眼のはたらきが役に立たないような在り方。こういう字を重ねて、我々が過去のこと、未来のことを見通そうとするときに、ほとんどわからないのだと。そういう在り方の中で、「別離久しく長し」。人と人との間柄は、ちょっと現在だけ親しくしていたり、あるいは過去からずっと一緒に生きてきたというような感覚がある。そういう中で亡くなっていった場合、どこへ行ったのかわからない。「道路同じからずして会い見ること期なし」（同上）。一緒に生きているように見えるけれども、ちがう道を歩いている。だから、いつになったら会えるのか。「甚だかた難し、甚だあ難し。また相値うことを得んや」（同上）。たとえ会ったとしても、もう一度会うことはほとんどできないと。

■本当に生きた人に遇いたい

私どもはこうして生きているけれど、生きてい

ることの意味、生きることの本当の喜びを求める。本当に自分で自分に納得できるようなものに出遇うとはどういうことなのかと。こういうときに、やはり我々が求めるのは、本当に生きた人がいたら、その人に遇いたいと。人間は、本当に生きることを教えてくれる生きざまをする人を求めているのだと思うのです。

そうした不思議な思いを私も青年期にもって、本当にそういう人がいるのだろうかと求めてみたけれども、それが見えない。本当に生きるということを生きている人が見えない。そういう思いがあって、結局、仏陀というような理想像がもしあって、それを本当に求めて生きている人がいるならという思いで京都へ行ったのです。今ごろになって、ああ、そういう要求があって行ったのかと思うのですけれども。

そうして出遇うことができた。出遇うことができたその人は、実は、本当に仏道を求めて生きた人を求めた人であった。その人がまた先に求めた人をモデルとして生きようとして、それがまた次々に人を呼び寄せて、人を生み出してくる。

それは結局、人を求めるように見えるけれど、人ではなくて、人を生かしている真理性、「ダルマ」と言われる法があって、その法を求めて、法を生きようとする。つまり、本当の命を与えてくれるものを求める。そういうことが人間として生きるということには常に与えられているのかなと思うのです。人間を超えたものがあって、それを信ずる。

けれども、実際は、例えばキリスト教であれば、イエスという人が現れて、教学ができるけれども、

親鸞仏教センターの動き

(2018年11月～2019年1月) 一抄一

そのイエス像を求める。そういうことが生きたキリスト教を常に新しく新しく生かしている。仏教であれば、お釈迦さまが苦悩して求めた、その姿を求める。お釈迦さま自身が人に依るな、法を生きよと、こう遺言したと言われている。しかし法、ダルマを求めると言うけれど、ダルマそのものは、そのダルマと称される真理性を信じてそれを生きた人を通してはたらく。本当にこの窈窈冥冥として何も見えない命を生きているにもかかわらず、そういう命を共に生きている中に、真理を求めて歩んだ人が灯火のように現れる。あとから行く者は、そういう者との出遇いを深く求めて歩んで行く。こういうことが説得力をもって教えとなり経典ともなり、そして新しく人を生みだしてくるのではないかと思うのです。

■「何ぞ衆事を棄てざらん」

ですから、「何ぞ衆事を棄てざらん」(同上)と。人間がこの世を生きているときには、何を生きているかわからないけれど、とにかくその場で興味を引かれるものに夢中になってしまう。そういうことが「衆事」という言葉で言われてくるのでしよう。命が生きているということは、状況と共に生きていますから、その状況に埋没して状況によって動かされて生きてしまう。そういう在り方が「窈窈冥冥」という在り方になっているわけです。結局、何を生きてきたのかわからない。これから先もどうなっていくのかわからない。そういう在り方に対して、なぜそういう在り方を脱出しようと思わないのかと、こういう呼びかけです。

『無量寿経』のこのいわゆる「三毒段」に入ってから文章は、この世の在り方、人間が迷い苦しむ、そして苦悩の命を増幅していくことを描いているけれども、その中に何か求めざるを得ないのだということを教えようとしている。こういうことがうかがわれます。

(文責：親鸞仏教センター)

■2018年

- 11/2 龍谷大学アジア仏教文化研究センター2018年度国際ワークショップ「日本仏教と西洋/世界の19世紀」(京都市・龍谷大学):長谷川研究員発表「受容と抵抗—井上円了と欧米の東洋学・仏教学—」
- 11/6 第116回(通算第167回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 11/9 ご命日のつどい
- 11/12 第194回清沢満之研究会
- 11/16 第8回(通算56回)『尊号真像銘文』研究会
- 11/19 第18回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 11/20 第218回英訳『教行信証』研究会「『教行信証』「証巻」における法身の「意志」問題——鈴木大拙の解釈を中心に——」早稲田大学大学院非常勤講師・大正大学非常勤講師:ステファン P. グレイス氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 11/27 御正忌報恩講讃仰講演会(しんらん交流館)講師:本多所長
- 11/30 第31回「『教行信証』と善導」研究会・第9回(通算57回)『尊号真像銘文』研究会(合同開催)「鎌倉仏家の注釈活動—親鸞遺文を通して—」東京女子大学名誉教授:金子彰氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/3 第219回英訳『教行信証』研究会
- 12/4 第19回「三宝としてのサンガ論」研究会
第117回(通算第168回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/6 第14回研究員と学ぶ公開講座「仏法が伝承される歴史空間—第一結集と『大智度論』—」担当:戸次研究員①12/6②12/13③12/20④12/27
- 12/8 井上円了研究センター第1回合宿研究会(熱海市・東洋大学熱海研究センター):長谷川研究員発表「井上円了と清沢満之における欧米の仏教学・東洋学の受容」
- 12/14 ご命日のつどい・親鸞仏教センター報恩講
- 12/16 吉田久一基金研究プロジェクト「仏教思想を中心とした日本近代思想史の再考」第7回研究会(京都市・日独文化研究所):長谷川研究員発表「『大乘』仏教の哲学的再構築—近代仏教における井上円了の位置づけ—」
- 12/17 第32回「『教行信証』と善導」研究会
- 12/18 第195回清沢満之研究会
- 12/25 第10回『尊号真像銘文』研究会
- 12/26 山陽教区聖教学習会(姫路船場別院)講師:戸次研究員

■2019年

- 1/9 第118回(通算第169回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/10 第14回研究員と学ぶ公開講座「教育者としての井上円了・清沢満之」担当:長谷川研究員①1/10②1/17③1/24④1/31
- 1/11 ご命日のつどい
近現代『教行信証』研究検証プロジェクト「真宗学の〈解釈と方法〉をめぐる課題」龍谷大学教授:杉岡孝紀氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 1/21 第33回「『教行信証』と善導」研究会
- 1/22 第20回「三宝としてのサンガ論」研究会「ジャイナ教の信仰と生活」東京大学大学院助教:河崎豊氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 1/23 第220回英訳『教行信証』研究会
- 1/28 第11回『尊号真像銘文』研究会
- 1/29 第196回清沢満之研究会